

American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジヨージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第30回

レナード・スキナード 「サタデー・ナイト・スペシャル」

タフなバンドが銃規制を訴え人々を驚かせる



Lynyrd Skynyrd
"Nuthin' Fancy"
MCA ◯ MCA2137 [1975]
◁ MCA ◯ MCD12024

う。俺にとつては、おしゃれなレッド・ツェッペリンと無骨なデュープ・パープルの違いのように思えた。しかしこの感覚こそ彼らのいいところだった。アメリカ南部のプライドに溢れている。Big Attitude!

レナード・スキナードのセカンド・アルバム(74年)の1曲目「スウィート・ホーム・アラバマ」は、彼らの出身地であるアラバマの人種差別を歌ったニール・ヤングの曲「アラバマ」をけなした曲だ。当時スパースターだったニール・ヤングを悪く言うなんて、タフで、態度がでかい。今回紹介する「サタデー・ナイト・スペシャル」が入っている彼らの3枚目のアルバム(75年)のタイトルは「Nothin' Fancy」。これは、おしゃれじゃないという意味だ。

サザン・ロックのレッドネック・バンドとしてイメージを作ったレナード・スキナードが、この曲を3枚目のアルバムのオープニングにしたことは人々にショックを与えただろう。この曲はピストルの規制に賛成した曲だ。アウトローなレナード・スキナードが、まさかこんな歌を作るとは誰も思っていなかったはずだ。アメリカでは毎年たくさんの人々がピストルで殺されてい

メロディーがきれいで、カントリー・ジャズのさわやかさがあつた。オールマン・ブラザーズ・バンドはおしゃれなジャジー・ブルース。レナード・スキナードはハードなドライブイング・ロック・バンドだった。もちろんブルースの要素もあつたけど、アウトロー・カントリーなテイストだ。イメージはホワイト・トラッシュ(貧しい白人)のレッドネック(肉体労働者)バンドだろ

レナード・スキナードを初めて聴いた時、俺ははつきりいつて、かなりダサイと思つた。メロディーも冴えないし、印象はB級バンドだ。サザン・ロック・バンドとしてのデビューだったが、カントリー特有のダサさがあつた。でもそれがかえって野性的に思えて、思わずアルバムを買ってしまったんだ。ほかのサザン・ロック・バンドといえは、マーシャル・タッカー・バンド。彼らは

る。多くは安くて簡単に手に入るもので、そのピストルをアメリカとカナダではスラングで「Saturday Night Special」という種類を指すのではなく、安いピストルや手作りのピストルのことを言うんだ。その由来は、犯罪が土曜日に多いからだ。では、曲に入ろう。最初はリード・ヴォーカルのロニー・ヴァン・ザントのカウン

1, 2
1, 2, 3
Look it here!

ついで、△△△を見ろ！△と訳しがちだが、△これを聴け！△という意味だ。

Two feels they come a creepin'
Like a black cat do

△2本の足が、泥棒みたいにこつそり入ってくる△。「creep」には△嫌なやつ△という意味もある。しかもこの「two feels」は正しい英語ではなく。本当は「two feet」のはずだ。これはスラングでもあり、教育

を受けていない人たちが使うような言葉なんだ。「Like a black cat do」は、△黒い猫がやりやうだ△という意味だ。アメリカでは黒い猫は、悪いサイン。オーメン、つまり前兆だ。黒い猫が前を横切ると、悪いことや死が訪れるという。このフレーズをきくと人種差別に敏感な人が聞いたら、黒い猫⇨黒い奴⇨黒人とも捉えるだろう。「cat」には△奴△という意味もある。

And two bodies are lyin' naked
A Creeper think he got nothin' to lose
So he creeps into this house, yeah
And unlocks the door

△二つの裸体が横たわっている。侵入者は失うものなど何もないと思っっているから家の中に入ってドアの鍵を開けた△。この「door」はベッドルームの扉のことだ。アメリカの家のベッドルームのドアには、鍵がかかることが多いからね。

And while a man reaching for his
trousers
Shoots him full of 38 holes

△男がズボンを取ろうとしている間に、彼を撃つて38口径の穴だらけにしてしまった△。「reaching」は手を伸ばして取ろうとしていること。38は弾丸のサイズだ。38スペシャルというピストルがあつて、それは20年から90年代まで警察が使っていたものだ。でも、これはきつと違うだろうけど。ちなみにヴォーカルのロニーの弟ドニーのバンド名は、38スペシャルだ。

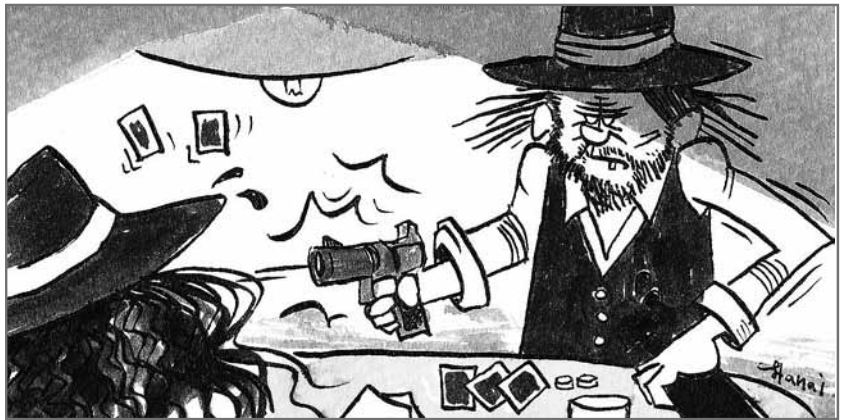
(chorus*)
It's Saturday night special
Got a barrel that's blue and cold
Ain't no good for nothin'
But put a man six feet in a hole

△サタデー・ナイト・スペシャル。青くて冷たい銃身を持っている。何もいいことに使えない。男を6フィートの穴に入れる以外はね△。なぜ6フィートかというと、アメリカではお墓を掘る時、深さを6フィートにするから。約2メートルだ。例えば「I'm gonna put in 6 feet under」⇨6フィート下に入れてやろう△とは、△殺してやろう△という意味になる。こんなふう

6ファイターという言葉はよく使われるんだ。

Big Jim's been drinkin' whiskey
And playing poker on a losin' night
Pretty soon, Big Jim starts a-thinkin'
Somebody been cheatin' and lyn'
So Big Jim commence to fightin'
I wouldn't tell you no lie
And Big Jim done grab his pistol
Shot his friend right between the
eyes

▲ビッグ・ジムはウイスキーを飲みながら、ツキに見放された夜にポーカーをしていた▼。'losin' night'の'tose'は△なくす▽ではなく、△負ける▽という意味。ビッグ・ジムはポーカーに負けているから、誰かが八百長をしていると思いつむ。そのうち彼は、八百長のことと頭がいっぱいになつていく。'win'は横になるのではなくて、嘘をつくことだ。だからビッグ・ジムは喧嘩を始める。▲俺はお前に嘘なんかつかないよ▼。この1行で、この曲を歌っているロニーが実際にその場にいたのではないかと感じる。そしてビッグ・ジムがピス



トルを手にして友達の眉間を撃つてしまふ。'right between the eyes'は眉間のこと。眉間を撃てば確実に人は死ぬからね。

(*repeat)
Saturday night special
For twenty dollars you can buy one
for yourself
I'm gonna tell you all about it

▲サタデー・ナイト・スペシャル、お前だって20ドルで自分のピストルが買えるんだ。話を教えてやるよ▼。ここはアドリブだ。

Handguns are made for killin'
Ain't no good for nothin' else

▲拳銃は人を殺すためにできている。それ以外には何の役にも立たない▼。アメリカでは銃を持つている人はたくさんいるが、ハンティング用が多い。自分の身を守るためという人もいるが、そんな人たちは安いピストルを持たない。サタデー・ナイト・スペシャルは品質が良くないから、あまり役に立たないんだ。

And if you like your whiskey
You might even shoot yourself

▲お前がウイスキーを好きなら、酔っぱらって自分を撃つてしまふんじゃないか▼。アメリカでは自分の銃で自身や仲間、回りの人たちを誤って撃つてしまふことがよくあるからね。

So why don't we dump 'em people
To the bottom of the sea

▲なんでみんな海の底まで沈めちまわななんだ▼。'dump'とは捨てること。ダン・P・トラックの名称も、捨てるに由来している。

Before some fool come around here
Wanna shoot either you or me

▲どこかのバカがこゝら辺にやってくる、お前や俺を撃ちたくなる前に▼。

(*repeat)

It's a Saturday Night Special

And I'd like to tell you what you can
do with it

▲それがサタデー・ナイト・スペシャルだ。そしてお前にそれをどうした方がいいか教えてやりたい▼。この'tell you what you can do with it'もよく使われる言葉で、次にくるのはたいてい捨て台詞だ。例えば、'Shove it up your ass!' // △嫌なら、お前の尻の穴に突っ込むぜ▼なんて感じかな。

今でもこのバンドはアメリカで人気が高い。ツアー中の77年10月20日、搭乗していた飛行機がミズーリ州で墜落しロニーを含む何人かのメンバーが亡くなって一度解散したが、87年にロニーのもう一人の弟ジョニーを中心に再結成、彼がヴォーカルを担当し録音もツアーも継続している。

彼らの曲で73年のファースト・アルバム

からシングル・カットされた「フリー・バード」とい

う作品があるが、この曲はアメリカのロック・クラシックスのひとつになっている。盛り上がる曲だから、アマ



ジョージ・カックル / GEORGE COCKLE
ラジオ・パーソナリティ。1956年、鎌倉生まれ。18歳で新宿2丁目のロック・バー<開拓地>で、音楽の世界にのめり込む。ハワイアンなどのCDをプロデュースする傍ら、インターFMでは音楽番組「レイジーサンデー」のパーソナリティをつとめ、音楽通ぶりを披露。さらにサーフ・イヴェントなどのMCでも活躍。
http://whatsupmusic.inc.com

チュア・バンドにはよくカヴァーされている。ライブハウスやコンサート会場では、演奏しているバンドが下手だと、ブーイングと一緒に「フリー・バード」と観客たちが叫び始める。その声がどんどん大きくなって、ブーイングよりも恐ろしく響き渡ることもある。俺は下手な演奏をしたバンドがステージから降ろされるのを見たことがあるけど、かなり無惨だった。アメリカの客はシヴィアなんだ。

レナード・スキナード、このバンドのハードなイメージのせいでも、リード・ヴォーカルのロニーが素晴らしいソングライターだと気づかれないことも多い。しかし彼は、この曲のように、南部やアメリカの文化を匂わせつつ、ストーリーを組み立てる能力に長けたテクニカルな作詞家だ。そう思っ

